

武蔵野日曜聖書講筵 幕屋創立36周年記念

往相還相

——詩篇第126篇——

1976年9月19日

兄がなければ今日の私はない 神さまと一緒に帰ってくださった 本当の元のところに帰って
いこう 相対界において絶対界をつかむ 十字架を本当に受けとれば聖霊はきたらざるを得な
い キリストの中に入れられることが往相 棟方志功「絵バカ」 詩「イン・クライスト」 弔
辞 小池政美君ノ霊ニ告グ 祈り

【詩篇126】（私訳）

宮のぼりの歌

1 エホバがシオンの命数^{さだめ}を転^かえた時、
我らは夢見る者の如くであつた。

2 その時の笑声^{わらい}はわれらの口に満ち、
歎声^{よろこび}は舌にあふれた。

その時諸国の民が言つた、

「エホバは彼らに大いなるわざを作した^な」と。

3 エホバ我らに大いなるわざを作し給うたので、

我らは歓喜の人となつた。

4 エホバよ、我らの命数^{さだめ}を転^かえ給え、
南方^{みなみ}の諸々の川の如くに。

5 涙と共に播^まく人は

歎声と共に刈り穫^とるよ。

6 彼は涙しながら出て往つた、
種子袋^{たね}をたずさえて。

彼は歎呼^たして帰つて来るよ、
おのが禾束^{たば}をたずさえて！

●兄がなければ今日の私はない

1940年9月22日に——1921年の9月22日に私の兄が去ってから半世紀以上たち
ました——この兄の命日を期してこの集会を始めたわけですが、55年たとうが何年たとう
が、私には昨日のようであります。この兄がなければ今日の私はないというわけです。そ



いうことで、この記念集会をする時には、どうしても兄を想わざるをえない。私事にわたって恐縮でございませけれども、私にとつては単に私事でないものですから、おゆるしを願いたいと思います。

この集会を始めてから36年たったわけですが、その歴史をいろいろ今日お話しても大変ですから、やめますけれども、これは『曠野の愛』誌の32号（1960年早春号）と36号（1961年晩秋号）に「私の信仰史と現在」、「曠野四十年」というのが書いてありますので、ご参考になってください。

●神さまが一緒に帰ってくださった

今日は詩篇126篇を主題として自由に話させていただきたいと思っています。自分の訳を読みます。「エホバ」は「ヤーヴェー」という。

宮のぼりの歌

1 エホバがシオンの命数を転えた時、
我らは夢見る者の如くであつた。

2 その時の笑声はわれらの口に満ち、
歡声は舌にあふれた。

その時諸国の民が言つた、

「エホバは彼らに大いなるわざを作した」と。

3 エホバ我らに大いなるわざを作し給うたので、

我らは歡喜の人となつた。

4 エホバよ、我らの命数を転え給え、
南方の諸々の川の如くに。

5 涙と共に播く人は

歡声と共に刈り穫るよ。

6 彼は涙しながら出て往つた、
種子袋をたずさえて。

彼は歡呼して帰つて来るよ、

おのが禾束をたずさえて！

短い詩で、たった6節の詩です。詩篇はむしろ短い詩篇がいいですね。詩篇23篇も6節ですが。この詩篇はいわゆる「宮もうでの歌」という一連の詩篇の一つであります。120篇からずっと134篇まで続いています。この126篇もその著しい詩篇の一つです。

「神さまがシオンの帰りくる者と共に帰り給ひし時」

というのは、歴史的にいうと、バビロニア捕囚からイスラエルの捕囚の民がエルサレムに帰つた、その時のことが背景になつてゐるわけです。これはイザヤ書の40章の始めの方に



そのことが出てます。いわゆる第二イザヤです。イザヤ書40章から55章まで。

「神さまと一緒に帰ってくださいった」

という言い方です。「神さまが我々を帰した」というのでなくて、

「帰りくる者と一緒にヤーヴェーが帰ってくださいった」

という。イスラエルの民の在り方というのは、いつも「神と共に」。

「神われらと共に」「インマヌエル」

という言葉が示しているように。英語の「グッドバイ」というのは

「ゴッド・バイ」(Good bye)「神と一緒にいらつしやるように」

という、別れの挨拶としては立派な非常にいいものですね。フランス語の

「アデュー」(a Dieu)「神のみもとへ、あなたを神に託します」

とか。

「我らは夢見る者の如くなりき」

と。私たちは夢見る者の如くであつた。

「こんなに早く帰れたか。こんなに見事に帰れたか」

というわけで、「夢見る者の如くで、これが現実かと思うようにうれしかった」と。

²その時の笑声はわれらの口に満ち、

笑声は舌にあふれた。

「笑い」「笑声」^{ようこび}、「口」「舌」とみな対句的な言い方をしている。歓声をあげて帰ってきた。

歓呼の声をあげて帰ってきた。

その時諸国の民が言った、

「エホバは彼らに大いなるわざを作した^な」と。

これはペルシヤ王キュロスをしてそのようなことにさせたのは、背景に神の力があつたか

らだというわけです。「ヤーヴェー」というのはもちろん「実存者」、

「在りて在る者」

を私は

「在りて在らしめる者」

と訳していますが。ヤーヴェーが在ることがイスラエルをして在らしめている。これが「ヤ

ーヴェー」という名前の本義であると思います。

³エホバ我らに大いなるわざを作し給うたので、

同じことを今度は一人称で複数で言っている。

我らは歓喜の人となった。

いかにもうれしそうな歌ですね。歓喜の人となったと。

⁴エホバよ、我らの命数を転え給え、

南方の諸々の川の如くに。



4 節にくると、ちょっと変わってしまった。

「エホバよ願わくはわれらの俘囚^{とらわれびと}をみなみの川のごとくに帰したまえ」

という訳がしてありますが、口語訳では、

「主よ、どうか、われらの繁栄を、ネゲブの川のように回復してください」

とある。「繁栄」と訳したのは少し強く訳したので、本来は「運命」「定め」のこと。私の訳では「命数^{さだめ}」とした。「南方の諸々の川」というのは、流れの水の雨量によって変わってくる。そういうことを言っただけです。「運命」とか、「帰還」とか、「囚われ」とかいう。

「シユーブ」という字が、原語で「シャバー」と読む場合と、「シユーブ」と読む場合と、母音をちよつと変えると別の字になってしまう。「シユーブ」という字が「帰る」あるいは「さだめ」「運命」というような意味になる字です。「南方の諸々の川」というのは、「ネゲブの諸々の川」という、ユダヤの南の地帯の名前です。それを普通名詞では「南方」ともいえるわけです、「ネゲブ」というのは。地名であると同時に「南」を指す言葉です。それはベエル・シエバからずっと南の方、カデシユのあたりまでずっと荒野地帯のことをいう。

● 本当の元のところに帰っていいこう

⁵ 涙と共に播^まく人は

歓声と共に刈り穫^とるよ。

実に彼らは囚われ人となったときには、血と涙を流した。けれども、今や歓びと共にその運命を刈り取ったわけであると。

⁶ 彼は涙しながら出て往った、

今度は単数で、

種子袋^{たね}をたずさえて。

彼は歓呼して帰って来るよ、

おのが禾束^{たば}をたずさえて！

始めに苦しみ、涙があつて、終わりに歓び、歓喜があると。この囚われからの帰還ということが歴史的な背景となつて、その神の恵みを歓び歌っているというのがこの126篇のだいたいの意味であります。

私は、この「帰る」「シユーブ」という言葉を非常に深く考えざるを得ない。キリスト教の歴史でも原始の、あるいは仏教でもそうですが、その宗教の発生の時、始めの時に帰る。宗教改革がそうであります。マルチン・ルターの宗教改革が、

「もとの福音に立ち返らなくてはいかん。使徒たちの伝えた福音は、今のカトリックのようなものではないんだ」

と言って、原点の事態に戻す。帰り行く。これが実は改革になる。それをまたある意味において、内村鑑三先生が無教会主義を唱えて、



「いわゆる教会組織というようなものに拘ってはいかん」

というので、新しい息をそこでもって吹き返していくというような運動が、いわゆる内村鑑三先生の無教會的運動であった。これがまた「無教會主義」なるものが、いわゆるエピソード（追従者、模倣者、亜流）によって主義化してしまつて、イズムになつてしまつて、無教會主義というひとつの殻の中に入る。知らない間に。それだから、私は、これはいかんと。私は無教會主義の本流にいたわけですが、そういうことは私は聖霊をうける前から、ある意味において気がついていて、1940年から集会を――他の事情もありましたけれども、失明している母のために家庭集会を開くというような気持ちも一つの動機であつたけれども――ここで始めた。しかし、その第一回の時に、不思議なことに矢内原先生がやつて来られて、私を非常に祝福してくださつたということもあります。

本当のところは帰つていこうと。要するに、自己に執してはいかんということです。プロテスタントというのは、カトリックにプロテストしたということは、ある意味においては言えるでしょうけれども。マルチン・ルターはカトリックの一員であつた。だから、カトリックにプロテストするということは、自分自身の在り方に対してプロテストするということその中に含んでいるわけです。彼は特に使徒パウロの事態に非常に共感をおぼえて、ガラテヤ書、ローマ書というようなことで、新しく福音の事態を展開したわけです。それが期せずして宗教改革となつたので、彼はなにも改革しようと思つたのではない。そういうように、元^{もと}に帰る。元というのはなにも人間的な元ではない。相手は神さまですから。キリストは神の現象体ですから。

「我を見し者は父を見しなり」

と言えたキリスト。

「このキリストに――カトリックでもプロテスタントでもない、アポスツリーシユ、使徒的です――キリストの直弟子と同じ次元に立ち返ろう、それが本当の前進である」

という意味で、特に1950年から私はそのことを宣言して始まつているわけです。そうなつてくると、今までの無教會からはすつかり除け者にされて、

「小池はどうもおかしい。変わった」

なんて。どっちがおかしいかとまあ言うわけですが、無教會のアウトサイダーになったら、私は、パウロさん、ペテロさん、ヨハネさん、ヤコブさんのインサイダーになりつつ限りなく進んでいく。これが武蔵野幕屋の本質であるわけです。

●相対界において絶対界をつかむ

帰つてやまない。あるいは、それはキリストのもとに往き往きてやまないといつてもいい。それは仏教的な言葉でいえば、「往相」になる。今日の題は



「往相還相」

という。仏教の言葉に「往生」という素晴らしい言葉がある。「往^ゆきて生きる」という。まさに往生する。キリストのもとに往きて生きるんです。そんなふうに普通は使いませんよ。使いませんけれども、言葉通りにいうと、そうなんです。キリストのところに「往く」とあるいはそれを「還^{かえ}る」といったっていい。それは往還一如なんだから、ある意味においては。「往」と言おうが、「還」と言おうがいい――まあ往相、還相ということはちゃんと区別していいですが――私はそれを「往く」と言おうが、「還^{かえ}る」と言おうが、往くも還るも同じことだという。キリストのもとに、あるいは「還り往く」と言ったっていい。まさに「還り往く」という言葉があるんだから。

「聖書、聖書」と無教会でも言います。あるいは、教会でもどこでも言うでしょう。「聖書、聖書」と言うけれども、ではいつたい、その聖書をどのように言っているか。

申し上げておおり、聖書はドラマですから、そのドラマの現実の中に自分を入れていく。サマリヤの女とキリストが語っていたら、自分がサマリヤの女になって、その現実において聖書を読む。

「読むのではなくて、聖書の現実の中に自分を本当に入れていく、入る」

入っていかないものは、何にもならないです、すべて。そのドラマを今度は自分で表現していく。からだでもって現じていく。

「分かるの分からないの。その意味がどうのこうの」

と、そんなことではない。大体、「聖書研究会」とか「聖書何とか会」なんてものはみんなその角度が観念的にズレてしまっているから。それはどうしてもやり替えしなければダメです。

それでもうキリスト直結――

「使徒的信仰」

といつてももちろん結構ですが、別な言葉でいうと――

「キリスト直結」

の事態です。マルチン・ルターはもちろんそれを言ったわけでは

「神―キリスト―我」

という。

「まん中に祭司も坊さんも何も要らん。万人祭司である。一人びとりが坊さんである」

とまあ言うわけです。これはルターが言ったとおりなんです。このキリストに直結する。だから、

「ヤーヴェー、シオンの帰り往く者と帰り給いし時」

という言葉は非常におもしろい。そこで帰って行ったのは現実のエルサレムです。けれども、



これをもつと靈的次元で読むと、神さまが、キリストが私たちと一緒に——どこへ帰っていくんですか——本当の天的現実、天国的な現実へと帰っていく。そのときに、私たちはなにも

「今の現実を捨てろ」

というのではない。この相対的現実の中に、奥に、絶対的な現実がある。天的現実がある。その中に入っていく。これが本当の世界なんです。相対界において絶対界をつかむということなんです。いわゆる相対・絶対としてただ分けているのではない。我々が普段この五感をもつて感じている世界は相対界ですが、その奥に、

「目いまだ見ず、耳いまだ聞かず、心にまだ思わざる世界」

そういう現実をその相対の奥の中につかむ。この相対的移りゆく現在において永遠を生きるということです。これは神・キリストという永遠体、天国体と一つとなる時にこれができる。そうでなければできない。これが本当の信仰の現実なんです。

仏教でいうところの「往相」というのは、特に浄土真宗ですけれども、大日如來の世界へと入っていく、

「南無阿彌陀仏」

をもつて。けれども、この「往相」も、その信者の、信徒の力では入れない。入り往こうという念願は大事なんです。この念願は大事だけれども、念願だけでは入り往けない。念願に対して

「本願」

がかかってくる。弥陀の本願の力でもつて、この「往く」ということができるんです、「往相」が。これに引つ張り上げられて往く。吸い上げられていく。磁石が北の方を指さざるをえないようにされるように。

●十字架を本当に受けとれば聖霊はきたらざるを得ない

キリストというこの力ある実在は天界にいらつしやる、靈界に。私たちをそこへ引つ張り上げる。そこには、引つ張り上げるにはもうひとつ別な要素は——この福音の世界では二つの要素がある——

「十字架」

です。十字架によって、自己主張で引つ張り上げられようとしなくていいところの我というやつ、自我というやつ、我執というやつを、自我とか我執とかいうのをキリストが十字架に付けてしまった。

「そんなものはぜんぶ贖ってしまったよ」

と。これ（自我）は「罪」なんだから、罪のかたまりなんだから。

「その罪のかたまりであるお前は、ぜんぶ私が十字架で贖ったから。お前には実は



そういう力がないから」

と。自分で自分をどうしようという力は本当はないわけなんだが、しかし、この十字架を受けとらないと、いつもこの我執にとらわれてどうにもならないわけです。どうにもならないようになってきているのは、我々は機械でないから、自由だから。神さまは私たちを、魂を自由につくっている。神さまは私たちに、

「ああ、背いたつていいよ、ご勝手だよ」

と。自己主張の自由というのは、そういう自由がたくさんある。今の人が言っているところの「自由、自由」なんてのは、我がままのような自由です。今の民主主義なんてとんでもない。そういう間違った民主主義、間違った自由、間違った自主、これはもうどうにもならないことは非常にはつきりしている。間違った自主、自由、そういう我執的なもの。これが神無き世界の、人間本位の、人本的な世界の自由なんです。相対的な道徳があるから、ある程度の舵^{かじ}はとれるよ。けれども、いつまでたつてもこれがガタガタガタしている。いつまでたつても同じこと。

けれども、キリストがこの十字架で贖った。

「はい、相対的な私は、いつまでも問題にしたつて始まらないから、もう問題にしません」

と。そうすると、キリストは何を下さるかという、これは

「聖霊」

です。十字架を本当に受けとれば、聖霊はきたらざるを得ない。それが来ていないんです、無教会では。教会でも聖霊なんてことも言うかもしれませんが。聖霊に「ついて」語ったつてダメですよ、いくら「について」語ったつて。聖霊の「中から」ものを言わなければ。この「聖霊」とかいうようなことは聖書に書いてあるから、「について」は語りますよ。神学者も「について」研究しますよ。いくらやつてもダメです。外側でただ外から眺めているだけ、外から研究しているだけです。水は H_2O であることがいくら分かったつて、渴きはなおらない。飲まなくては。分かっている世界なんだ、みんな今の大体の傾向が。第二の宗教改革がこななければいけませんよ、一人ひとりが本当に。

ここ（十字架）で自分がぶつつぶれて、自我というものはキリストが抜いてしまったんだから。無条件にですよ、無条件の世界。無条件に「はいっ」と言つて、感謝し、平伏せば、そこに入ってくるのは聖霊なんです。

「祈り」とは、

「その十字架の贖いを通して神の中に帰入する」

ことなんです。キリストの中に帰り入ること。帰入することが祈りなんです。何かお願いすることではない。そういう祈りの世界でキリストの中にのりかかってく。私はこうやって皆さんにお話ししながら、もうその世界に入っているから、やりきれないです、正直。



もう異言が出そうになる。

●キリストの中に入れられることが往相

キリストの中に入れられることが「往相」なんです。「往く」なんていったって、これはもう往かざるを得ない。ざるを得ないです。「ざるを得ない」というのがいけば本当の世界ですよ。

「こうしようか、ああしようか」

と選択して、「こうすべきである」なんていうのはまだてんでダメだ。

「かくせざるを得ない」

と、これは西郷南洲の大好きな言葉だ。

「やむにやまれざるところに至誠しせいがある」

と言った。至る誠がある。かくせざるを得ない。風が吹けば、木の葉は揺れざるを得ない。雨が降れば、地面は濡れざるを得ない。そういう自然法則よりもっと素晴らしい霊的法則の世界がある。自然法、道德法、靈法の世界。この最高の世界。パウロがローマ書8章2節で言っているとおり。

「生命の御霊の法」

という世界です。そういう世界。これが「往相」。往かざるを得ない。往生せざるを得ない。往きて生きざるを得ない。

それだけの力が、あなた方は今、聞きながら来てますか。つまらないよ、来てなかったら。

「そうですか?」

ではないよ、

「はい、来てます!」

と。そうして、キリストの中に入れられる。キリストは天界にいるから、「入れられる」ことは、別な言葉でいうと、キリストの方からおりてくるんです。降りてくる。一人ひとりの中におりてくる。一人のキリストがみんなのところに降りてくる。それは聖霊によって降りてくるんです。御霊のキリストがおりてくる。

天界にかかっている月は一つ。けれども、葉末の露はたくさんある。その葉末の露にみなが全的に満月が映る。百の露があつたら、百分の一が映るのではない。一つひとつの露に満月が映っている。そのように我々一人ひとりに全的に御霊のキリストが宿り給う。

「我なんじのうちに、なんじ我がうちに宿る」

とキリストは言われた。ヨハネ伝にあるとおり。「メネイン」という字ですが。

そういうわけで、一人ひとりにこの聖霊が宿っている。そうすると、往くも還るも同じことなんです。上から臨んでくるから。そうして引つ張られて、また上からおりてくる。御霊で。御霊のキリストが。そうしたら今度は、この一つひとつがもの凄いキリストの出



店みたいなものだから。「我はキリスト者なり」というのは、

「キリストの御霊を宿すものなり」

と、パウロが言っているではないですか、ローマ書8章9節で。そのとおり。

そうしたらば今度は、往った者が還つてきて、人々にこれを分かつたざるを得ない。この「入つて還つて来る」方が「還相」です。そしてそれが細胞分裂を起こす。一人びとりは即ち、存在をもつて伝道するわけです。伝道者ばかりが伝道ではない。だから、「往相・還相」を本当の意味において――「往相回向」とか「還相回向」とかいいますね、仏教的な言い方なら本当は「げんそう」と読む――この「往相・還相」の事態は、福音的にいうと、いちばんはつきりする。福音の世界では、これをいちばんはつきりつかめる。実体であるところのキリストがそのことをなし給うから、我々の中に。

あなた方を、一人びとりを本当にそのようにキリストが使うときに初めて、私たちが証人であるわけです、証者であるわけです。キリスト者は証者でなかったら、キリスト者ではありません。

「福音を聞いて何かいい気持ちになつておしまい」

なんてのはクリスチャンでも何でもない。そういう証者ということ。

●棟方志功「絵バカ」

私は棟方志功の展覧会に行った。絵のことはよくわからんき、私には。けれども、その迫力たるや、本当に寸毫の虚飾がないね。虚飾のあるものはダメですよ、いわゆる体裁を整えたものは。彼は全生命を打ち込んでいる。彼が描いている写真なんかあるけれども、まあ狂える人のごとくだね。「狂える」というのはいい意味ですよ。パウロも、

「福音のためには我は狂える人のごとく」

と言った。彼は「絵バカ」と自分を言っている。絵ばっかり書いているバカ者だと。絵の他はなにも知らんと。いいんだよ、それで。私も学校で言っているんです。生徒諸君に、

「君たちは自分の天から授かった才能、天賦がみなあるんだ。何でもいいよ。自分が一番好きだと思うものがあるはずだ。それに打ち込め。それに打ち込んで、それを中心にして動け」

と言っている。どれだけやっているか知らんけれども。

「平均点が何の、序列が何の」

とくだらないことを考えるなど。人間はそういう生き方をしなければダメです。ベーターベンはどうですか。なにもベーターベンにかぎらない。本当にそれぞれの仕事をした人は、工場の職工でも、

「私は歯車を造っている。この歯車の世界では天下一品のものを造つてやろう」という職工が本当の職工です。



日本みたいは何でもかんでも大学を出て、社会的にどうのと、くだらない。全く日本はおかしな国だよ。こないだドイツに行って、私はつくづくそのことを思った。ドイツ人はもつとそういう面の自覚がはつきりしています。ギムナジウム（高校）を出てても、必ずしも大
学へいかない。その他にいろいろな専門の学校がたくさんある。どうしてこの日本という
国はこうダメなんですかね、正直。あなた方は本当に火のごとくにならなければダメですよ、
いい加減なことでは。これはもう精神的にこう（下降カーブ）です、滅びますよ。

もう人ごとではない。あなた方一人ひとりにキリストという原始力が宿ってください。
そうしたらば、もう周りがどうであろうと、そんなことにひとつも左右されなくなる。い
わゆる無教会だって、始めは信仰的英雄みたいな顔しているけれども、だんだん放物線で
落ちてしまう。ダメです。自分なんか捨ててかかれと。そうすれば、上昇のカーブになる。

この棟方志功というのは全くおもしろい野郎だよ。まあ大変な人です、これは。本当に
私は愉快だね、こういう画家がいたということは。

「風を書くときには風を、雲を書くときには雲を、無を書くときには、その無を求めて
まず最初にあたまに描き、次に文字の造形性を超越した次元にまでその文字を高め、
追い求めて、筆先と紙面の接点を走り続けたといえる。」

これは棟方志功の書き方——書もありますけれども——彼はものを書くときに決して試
し書きをしないそうです。いきなり書く。精神を打ち込んで、もう書き出したら——私も
これ（講筵の題字）を書く時に書きそこないをやったことがない。まあこんなものはダメで
すけれども——とにかく、二枚目を思っ書いているうちはダメだと。一回限り、その白
紙に向かって。白い紙をじつと見ている。そして、ある気合がかかったら、そこで筆を起
こす。それまでは筆を起こさない。そして出来上がったものはどんなに変てこなように見
えても、実はそこに本当に生命が満ちている。ところが、書きそこないをやって、これを
もう少しこういうように訂正しようなんてやったら、それは作られたもの。どこまでも作
られたもので、そういう書き方をすると、そこに生まれたところの創造性がなくなってくる。
文章でもそうなんです。それはまあ添削もしましょうけれども、とにかく、そういう意
気込みでもって書いている文章は力ある文章である。いわゆる文法的にどうのこうのとやっ
ているうちはダメです。

「それはうまく出来ても出来なくても、最初に刷った板画が私の板画です」

と書いてある。うまいとかまずいとか、美だとか醜だとか、そういう相対概念は考えてい
ないというんです。これが本当の世界です。

とにかく、すべてが真剣勝負です。竹刀^{しな}ならさ、打ちそこなっただって何ということはな
いけれども、真剣勝負は、打ちそこなったら大変だよ、斬られるよ。この真剣勝負。死ぬ
か生きるかという。

「真剣に」ことをしろ



という言葉は本当はそういう意味です。弓道もそうだよ。二の矢を考えない。ただ一つの矢。この福音的な生き方がこれであります。自分を本当に打ち込んでいる。そうすると、十字架によって

「無者」

とされているんだから、私はキリストの無者なんだから。それは虚無ではないんです、この無者というのは。

「無者即無限無量者」

ということ。そういうキリストの証者とならなかったならばね。

私は特にこの36周年を迎えて――こないだの鹿沢の夏期特別集会（主題：ロマ書）は素晴らしいかったです――これから皆さんが本当にそのつもりでいよいよ展開してもらいたい。いい加減な人は、私はこつちから

「（集会から）出て行ってください」

と言いますから、はつきり。もう私も人生の72歳になったから、このラスト・スパートを――まだちょっと早いかもしれない――まだ20年くらいやるつもりだけれども。まだまだ私は20年くらい仕事をしないではいられません。まだ課題がたくさんあるから。

どうぞ、皆さんもまだ青年で、あなたは方は20代だの30代だのと、私はうらやましくてしょうがないよ。あなたの方は70になったら、もう光ってしまっって見えないうんじやないかな。しっかりやってくださいよ。いい加減なことではダメ。天界の使徒たちが、

「そーだー！」

と言って喜ぶようなクリスチャンになってください。

この棟方志功の打ち込みの姿がいい。ベートーベンにしてもそうです。もうとにかく気合のかからないものはつまらないよ。どうぞ、そういうことで、やってください、男の人も女の人も。何も運命環境をかこつことはない。絶対に。もうキリストのあるところには、一切のものを展開していくことのできるもの凄い力があるから。志功も柳宗悦とか河井寛次郎という人に、宗教的な人物にぶつかって、彼の絵は特別に展開を始めた。

●詩「イン・クライスト」

それから、多少想い出的な私事にわたって恐縮でございますが、私は私の兄貴のことをちよつと語らせていただきます。「イン・クライスト」「キリストに在って」という英語の詩を私は書いた。これは1951年の秋に書いたソネット、14行詩です。

IN CHRIST

O My brother, gone in youth !

Ever in Christ thou fought alone,

On thy cross thy hopes forlone,



Trusting thou in Father's truth.
Pure and earnest was thy love,
Some dark nights thou must have wept,
But thy heart was strongly kept;
Such a soul I wish to have.
Be my battle what it may;
For me the Spirit light shall be,
And then I march in graceful right.
Christ's the Power on my way;
And broken hearts are friends for me.
For you in Christ I pray by night.

——Autumn 1951 TATSUO

「キリストに在って」

噫、わが兄、若くして汝は去った！
独り易らずキリストに在って戦った。
希望を棄てて、十字架を汝は負った。
父神の信実まことに信頼しつつ。

汝の愛は純でまた熱かった。

幾夜かの汝の涙を誰が知ろう。

されど汝の心は雄々しくあった。

あのような魂で私もありたい。

私の戦いくさは何であろうと。

聖霊が私の光であるかぎり

恩恵の義にあって私は進む。

私の路みちの力はキリスト。

砕けた心は私の友よ、君らのために

キリストに在って夜ごとに祈る。

——1951年秋 彼岸

そういう詩です。まあ自分の兄貴のことを言っではおかしいですが、正直、掛け替えのない兄貴でした。私はもう本当に昨日のように想いだすことができるんです、非常に印象深くね。私が中学校のときに、彼は一高また東大の生徒でありましたけれども。卒業後、2年で仆れた。北京で腸チフスにかかって仆れた。



●弔辞 小池政美君ノ靈ニ告グ

それで、こんなものを読んで、おかしいかもしれませんが、こういう人でありましたので。兄が亡くなった時に上役の人が弔辞を読んでくれた。

「弔辞」

謹ミテ僚友故専売局副参事小池政美君ノ靈ニ告グ

君去年十一月選バレテ任ニ此ノ地ニ就キ爾来予等ト共ニ専ラ支那財政経済ノ組織的研究ニ従事シ夙夜恪勤精励圖書堆裏ニ在リテ倦ムコトヲ知ラス曩ニ「支那財政ノ現狀」テフ一文ヲ脱稿シ今夏亦「支那銀行二十年史」ヲ草シ神身ヲ勞スルコト頗ル多シ。稿終ルヤ欣然旅装ヲ整ヘ青島ニ暑ヲ避ケ留ルコト半月、静養其ノ効アリ更ニ勃々タル勇氣ヲ以テ滿洲ニ渡リ一ハ現下ノ紛乱ヲ極メタル大連取引所建直シ問題ヲ究メテ將米支那幣制改革上ノ実験的好資料ヲ得、一ハ日露代表委員大連會議ノ経緯ヲ探リテ両国通商上ノ適策ヲ案スルノ抱負ヲ以テ勇躍大連ニ入ルヤ不幸ニ豎ノ犯ス所トナリ未ダ調査ニ着手スルニ到ラス急遽北京ニ還リ病ヲ養フコト三旬、名医ノ献身の治療モ骨肉ノ寢食ヲ忘レタル看護モ其ノ効無ク終ニ復タ立ツコト能ハズ月ノ二十二日二十七歳ヲ一期トシテ溘焉トシテ逝キヌ、嗚呼悲シイ哉悼マシイ哉

回顧スルニ予ノ君ト交ル僅力二十閱月ニ過ギズト雖モ其ノ間君ニ負フ所甚ダ多ク又君ノ才徳ニ敬服スル所尠シトセズ、君大資穎敏頭腦明晰殊ニ数理ニ明力ニシテ心理学上ノ所謂数系ノ顯著ナル發達ヲ為シタル異才タルコト疑ハズ又其ノ研鑽ノ蹟ヲ見ルニ其ノ方法理路整然トシテ一糸乱レズ紛雜ニシテ捕捉スルニ難シトスル支那財界ノ諸問題モ之ヲ俎上ニ陳ベテ利刀ヲ以テ料理スルノ慨アリキ、加フルニ君ハ非凡ノ英文讀書ノ能力ヲ備ヘ、赴任以来欧米人ノ手ニ成レル支那ニ関スル名箸数十冊ヲ読破シ碌々タル儕輩数年ノ造詣ヲ一年ナラスシテ贏チ得タルノ想アラシメタリ、天若シ君ニ藉スニ歲月ヲ以テセバ君ノ研究ノ結果ハ啻ニ中日兩國の為ノミナラス、世界ノ文明ニ大貢獻ヲ為スニ至ルベキヲ信シテ疑ハザル所ナリ、而シテ今や此ノ人亡シ惜シムベキ哉

君ハ優秀ナル智能ノ人タリシト同時ニ崇高ナル人格ノ人ナリキ、惟フニ君幼ニシテ嚴父ヲ喪ヒ母君の手ニツニ依ル周到ナル鞠育ノ力ハ君ノ玉ノ如キ温良ナル人格ノ基礎ヲ作りタルべく、大学法科在学中深く内村氏ニ私淑シテ信仰ノ端ヲ開キ、教会牧師説教等ノ迂路ヲ辿ラス聖書ニ依リ独思冥想直チニ神ニ接スルノ信念ヲ堅メタルハ君ガ正道ノ為水火ヲモ辞セザル大勇猛心ヲ發揮スルノ根柢ヲ作りタルベクスノ如クシテ神人ノ力ニ依リテ渾一セラレタル君ノ人格ノ発露ハ或ハ謹嚴ナル素行トナリ、或ハ高尚ナル氣品トナリ、或ハ凡俗ト相容ルルノ雅量トナリ、君ト相交ル者ヲシテ轉々敬慕ノ情ヲ禁スル能ハザシメタリ、天若シ君ニ藉スニ寿齡ヲ以テセバ社会風教ノ薰化ニ大寄与ヲ為スニ至ルベキヲ信シテ疑ハザル所ナリ、而シテ今や此ノ人去ル憾ムベキ哉

君支那ノ土ヲ愛シ支那ノ生活ヲ好ムコト極メテ深シ、一日真卒ノ面持ニテ予ニ語り



テ曰ク、予ハ支那ヲ愛シ又其ノ生活ヲ好ム、予ハ終世支那ニ於テ過サンコトヲ冀フト、
而シテ毫毛故国ニ戀々タルノ態ヲ示サザリキ、其ノ言果シテ鍼ヲ為セル力遂ニ燕京
北邙ノ煙ト化シヌ、誰力知ラン其ノ期ノ斯クノ如ク速カナラントハ、想フテ之ニ到レ
バ腸寸断ス

サハレ君力懷抱セル支那研究ノ志ト支那愛好ノ至情トハ更ニ之ヲ継グ者踵ヲ接シテ
起ルベク又君力信仰ニ依リテ理想トセシ地上ノ天国恒久ノ平和モ人類ノ昂上ト世界ノ
進歩ト共ニ実現スルノ期無キニアラス君以テ瞑シテ可ナリ

庶幾クバ髣髴トシテ来リ饗セヨ

大正十年九月二十五日

大蔵事務官従五位勲五等

公森太郎

公森という方のなかなか名文ですね。まあそんなことで、おおいに期待されたんですけども。

そういう兄貴でしたが、私はこの兄貴がたおれて初めて目が覚めて、この信仰の世界に入った。でありますので、私の生涯は兄貴に対する感謝とまた弔い合戦ということであるので、まだまだ私は終わりません。これからが本式のというわけで、まあ第1巻が出ましたけれども、これから先、皆さんと一緒にやりたいと思っています。

どうぞ、お一人お一人が本当に生涯自分は何をしようかと、打ち込んでやっていただきたい。そしてそれと同時に、日曜を中心としたこの福音の活動には――私は決して無理は申しません――誠意をもつて協力していただきたい。こういうわけです。

問題は、キリストの弟子も、申し上げているとおり、たった四人です。たった四人の弟子がこのこの新約聖書を書かしめられて――福音書もあのパウロが土台になっているんですよ、あの福音書も――行つたので、どうぞ、「数の多いとか少ない」なんてことを問題にせず、ぜひとも、打ち込んでやってください。そして、本当に求めている人、苦しんでいる人を、いくらでも連れてきてください。いい加減なやつはいりませんから。どうぞ、そういうことでもつて、この鹿沢の大集会をひとつのカイロスとして、この秋の在り方向かって行きたいと思います。

● 祈り

天のお父さま。私たちの生命の贖い主キリストさま。この僕はまことにダメなやつですが、この36年間、あなたはこの僕を捨てず、滑つたり転んだりする僕をなお起こして、あなたはここまで至り着かしてくださいました。本当に感謝であります。この僕はどうでもいいです。この福音に接した人たちがこの福音から外れることのないように、また、去って行った人たちはいろいろな事情で去りました。しかし、あなたに、キリストに本当にぶつかって、

「ああここに天門が開けていた」



と、ヤコブのごとくに天の梯子を発見して、御霊の上り下りするのを見ることができま
すように願ひ奉ります。

私たちはこの主さまの往相還相によって自在に歩いて行くことができます。どんなに滑つ
ても転んでも躓いても、前進あるのみであります。どうぞそのようにして、兄弟姉妹たち
と共にいよいよ進んでまいります。この福音を宣べ伝えずんば石が叫びます。私たちは宣
べ伝えざるを得ません。

「この福音を宣べ伝えざれば禍害^{わざわい}なるかな」

とパウロは言いました。また、

「骨のうちに火の燃えつくがごとくにして、黙^{もだ}すに耐えがたし」

「神のみ言に酔えるがごとし」

とエレミヤが言いました。ご飯よりもあなたのみ言は、

「わが言は靈なり生命なり」

と。これは形容詞ではありません。その通りであります。

どうぞそのようにして、この聖書はこの聖書の文句のうしろから響いてくるところのあな
たの根源語に…(異言)…、いよいよ進んで行くことができますように。一人びとりが毎日
毎日をその意味において真剣勝負で進んで行くことができますように願ひ奉ります。……

もはや文化文明もこの福音でなければ、すべて倒れていきます。この福音が本当に根つ
ことなるときに、そこに葉が生じ花がさき果が実ります。どうぞそのようにして、あなた
の栄光が現れますように、私たち一人びとりを天下一品として一人びとりをお用いくださ
らんことを、鍛えくださらんことを、切に願ひ奉ります。

イエス・キリストの福音はなんと素晴らしいかな。パウロ、ペテロ、ヨハネ、ヤコブが
使徒行伝また書簡を通して叫んでいるその叫びは、まだまだ文字に伝えられかねておるく
らいでございます。どうぞ、聖書の響きは驚くべき響きであることに気がついて、進んで
いくことができますように願ひ奉ります。もはや、私たちの側の何ものでもありません。
主イエス・キリストが一切でありたもうことを、いよいよ身をもつて証していくことがで
きますように、お用いくださらんことを願ひ奉ります。

心からの感謝と讃美、今、兄弟姉妹たちのそれ共に、聖名により捧げ奉る。アーメン。

